

# 二〇一〇年度 国語

(六十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

中一本

※楷書体で丁寧な字で解答すること。記述の問題は、時間のある限り、しっかりと構想を練ってから書き出すこと。また、解答欄の下に示す評価基準も確認しながら、文章をよく推敲すること。

一 次の文章は、宮澤賢治の「けんじゅうこうえんりん 度十公園林」の一部です。読んであとの問いに答えなさい。

(なお問題文中の※は、終わりに注があります。)

度十けんじゅうはいつも縄の帯をしめてわらって杜もりの中や畑の間をゆっくりあるいているのでした。雨の中の青い藪やぶを見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔かけて行く鷹たかを見付けてははねあがって手をたたいてみんなに知らせました。

けれどもあんまり子供らが度十をばかにして笑うものですから度十はだんだん笑わないふりをするようになりました。風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは度十はもううれしくてうれしくてひとりでに笑えて仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立っているのです。

時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒かゆいようなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑いました。なるほど遠くから見ると度十は口の横わきを搔かいているか或あるいは欠伸あくびでもしているかのように見えました。が近くではもちろん笑っている息の音も聞きこえませんでしたし唇がピクピク動いているのもわかりました。から子供らはやっぱりそれもばかにして笑いました。

おっかさんに云いいつけられると度十は水を五百杯でも汲くみました。一日一杯畑の草もとりました。けれども度十のおっかさんもおとうさんも仲々そんなことを度十に云いいつけようとはしませんでした。

さて、度十の家のうしろに丁度大きな運動場ぐらいの野原がまだ畑にならないで残っていました。

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新あたらしい草も芽を出さない時、度十はいきなり田打ちをしていた家の人達の前まへに走はって来て云いいました。

「お母、おらさ杉苗七百本、買って呉くろ。」

度十のおっかさんはきらきらの三本鋤さんぼんくわを動かすのをやめてじっと度十の顔を見て云いいました。

「杉苗七百ど、どごさ植うえらい。」

「家のうしろの野原さ。」

そのとき度十の兄さんが云いいました。

「度十、あそこは杉植うえでも成長おがらない処ところだ。それより少し田でも打うって助すける。」

度十はきまり悪わるそうにもじもじして下を向むいてしまいました。

すると度十のお父さんが向むうで汗を拭ぬきながらからだを延のばして

「買ってやれ、買ってやれ。度十あ今まで何一つだて頼たのんだごとお無ないだったもの。買ってやれ。」と云いいましたので度十のお母さんも安心あんしんしたように笑わいました。

度十はまるでよろこんですぐにまっすぐに家の方へ走りしました。

そして納屋から唐鋤どうくわを持ち出してほくりほくりと芝しばを起たして杉苗を植うえる穴を掘ほりはじめました。

度十の兄さんがあとを追おって来てそれを見て云いいました。

「度十、杉あ植うえる時、掘ほらないば※わがないんだじゃ。明日まで待まちて。おれ、苗買えって来てやるがら。」

度十はきまり悪わるそうに鋤くわを置おきました。

次の日、空はよく晴はれて山の雪はまっ白しろに光ありひばりは高く高くのぼってチークチークやりました。そして度十は

まるでこらえ切れないようににこにこ笑って兄さんに教えられたように今度は北の方の塚から杉苗の穴を掘りはじめました。実にまっすぐに実に間隔正しくそれを掘ったのでした。度十の兄さんがそこへ一本ずつ苗を植えて行きました。

(中略)

その日はまっ白なやわらかな空からあめのさらさらと降る中で度十がただ一人からだ中ずぶぬれになって林の外に立っていました。

「度十さん。今日も林の立番だなす。」

箕を着て通りかかる人が笑って云いました。その杉には鶯色の実がなり立派な緑の枝さきからはすきとおったつめたい雨のしずくがポタリポタリと垂れました。度十は口を大きくあけてはあはあ息をつきからだからは雨の中に湯気を立てながらいつまでもいつまでもそこに立っているのです。

ところがある霧のふかい朝でした。

度十は萱場で平二といきなり行き会いました。

平二はまわりをよく見まわしてからまるで狼のようないやな顔をしてどなりました。

「度十、貴さんどこの杉伐れ。」

「何してな。」

「おらの畑あ日かげにならな。」

度十はだまって下を向きました。平二の畑が日かげになると云ったって杉の影がたかで五寸もはいつてはいなかったのです。おまけに杉はとにかく南から来る強い風を防いでいるのです。

「伐れ、伐れ。伐らないが。」

「伐らない。」 度十が顔をあげて少し怖そうに云いました。その唇はいまにも泣き出しそうにひきついていました。実はこちらが度十の一生の間のたった一つの人に対する逆らいの言だったのです。

ところが平二は人のいい度十などにばかにされたと思ったので急に怒り出して肩を張ったと思うといきなり度十の頬をなぐりつけました。どしりどしりとなぐりつけました。

度十は手を頬にあてながら黙ってなぐられていましたがどうとうまわりがみんなまっ青に見えてよろよろしてしまいました。すると平二も少し気味が悪くなったと見えて急いで腕を組んでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまいました。

さて度十はその秋チブスにかかって死にました。平二も丁度その十日ばかり前にやっぱりその病気で死んでいました。ところがそんなことには一向構わず林にはやはり毎日毎日子供らが集まりました。

お話はずんずん急ぎます。

次の年その村に鉄道が通り度十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰れて家がたちました。いつかすっかり町になってしまったのです。その中に度十の林だけはどう云うわけかそのまま残って居りました。その杉もやっとい丈ぐらい、子供らは毎日毎日集まりました。学校がすぐ近くに建っていましたから子供らはその林と林の南の芝原とをいよいよ自分らの運動場の続きと認めてしまいました。

度十のお父さんももうかみがまっ白でした。まっ白な筈です。度十が死んでから二十年近くなるではありませんか。

ある日昔のその村から出て今アメリカのある大学の教授になっていて若い博士が十五年ぶりで故郷へ帰って来ました。

どこに昔の畑や森のおもかげがあったでしょう。町の人たちも大ていは新らしく外から来た人たちでした。

それでもある日博士は小学校から頼まれてその講堂でみんなに向うの国の話をしました。

お話がすんでから博士は校長さんたちと運動場に出てそれからあの度十の林の方へ行きました。すると若い博士は愕おどろろいて何べんも眼鏡を直していましたがどうとう半分ひとりごとのように云いました。

「ああ、ここはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ。木は却かえって小さくなったようだ。みんなも遊んでいる。ああ、あの中に私や私の昔の友達が居ないだろうか。」

博士は俄にわかに気がついたように笑い顔になって校長さんに云いました。

「ここは今は学校の運動場ですか。」

「いいえ。ここはこの向うの家の地面なのですが家の人たちが一向かまわないう子供らの集まるままにして置くものですから、まるで学校の附属の運動場のようになってしまいました。が実はそうではありません。」

「それは不思議な方ですね、一体どう云うわけでしょう。」

「ここが町になってからみんなで売れ売れと申したそうですが年よりの方がここは度十のただ一つのかたみだからいくら困っても、これをなくすることはどうしてもできないと答えるそうです。」

「ああそうそう、ありました、ありました。その度十という人は少し足りないと思っていたのです。いつでもはあはあ笑っている人でした。毎日丁度ちやうどこの辺に立って私らの遊ぶのを見ていたのです。この杉もみんなその人が植えたのだそうです。ああ全くたれがかしこくたれが賢くないかはわかりません。ただどこまでも※2十力の作用は不思議です。ここはもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうでしょう。ここに度十公園林と名をつけていつまでもこの通り保存するようにしては。」

「これは全くお考えつきです。そうなれば子供らもどんなにしあわせか知れません。」

さてみんなその通りになりました。

芝生しばふのまん中、子供らの林の前に

「度十公園林」と彫ほった青い※3鞞かんらんがん憤ひ岩の碑ひが建ちました。

昔その学校の生徒、今はもう立派な検事になったり将校になったり海の向うに小さいながら農園を有もったりしている人たちから沢山の手紙やお金が学校に集まって来ました。

度十のうちの人たちはほんとうによるこんで泣きました。

全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂におい、夏のすずしい陰かげ、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本当のさいわいが何だかを教えるか数えられませんでした。

そして林は度十の居た時の通り雨が降ってはすき徹とほる冷たい雫しずくをみじかい草にポタリポタリと落しお日さまが輝いては新しい奇麗きれいな空気をさわやかにほき出すのでした。

※わがない…「だめだ」の意。

※十力…じゅうりき积しや迦かの力のこと。

※橄欖岩かんらんがん…きらきらとオリーブ色の細かな光沢を放つ。

問一 右の文章から「度十」はどのような人物であると読み取れますか。そう考える理由を入れて二百字以内で述べなさい。(ただし、句読点も一字とする。)

問二 傍線部「本当のさいわい」とありますが、宮澤賢治が考える「本当のさいわい」とは、どのようなものであるとあなたは想像しますか。あなたの考えを百字以内で述べなさい。(ただし、句読点も一字とする。)

問三 右の作品以外の、宮澤賢治の作品を一つ、答えなさい。

# 二〇一〇年度 国語

(六十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

中一 本

【一】次の文章は、藤原正彦の「国家の品格」の一部です。読んであとの問いに答えなさい。

(なお本文は問題作成の都合上、一部表記の変更・省略があります。)

無常観<sup>1</sup>というのは元々、インドのお釈迦様<sup>しやか</sup>が言ったことです。お釈迦様の言う無常は哲学です。万物は<sup>1</sup>ルテンする。永遠に不変なものは存在しない。どんどん変わってしまう。いまあなたがいる建物も必ずいつかは朽ち<sup>2</sup>ハてる。あなたの周りの人間も百年後には誰もいない。何もかも永遠に同じ形を保つことは出来ない、という当たり前ともいえる哲学です。

日本人というのは何でも直ちに真似をして、それをアツという間に変質させ、自分ならではのモノにしてしまう天才的な能力を持つ民族です。漢字を真似してからアツという間に訓読みと万葉仮名、続いて平仮名、片仮名を発明して完全に日本のものとしてしまったのが好例です。

北インドから中国を通じて日本にきた無常観も変質を遂げました。日本人の無常観は、「すべては変わりゆく」というドライな<sup>※1</sup>達観<sup>たつかん</sup>から派生して、弱者へのいたわりとか敗者への涙という情緒<sup>じやうちよ</sup>を生み出した。ドライな達観が、慘く悲しい宿命を共有する人間同士の連帯、そして不運な者への共感へと変質していったのでしよう。

『X』の中に、武士道の<sup>3</sup>テンケイとして新渡戸<sup>にと</sup>稲造<sup>いなぞう</sup>の『武士道』の中でも引用される有名な場面があります。一の谷の合戦の際、熊谷直実<sup>くまがいなむね</sup>が敵の武将を捕まえた。殺そうと思つて顔を見ると、まだ若い。十五歳の平敦盛<sup>あつもり</sup>だった。

自分の息子ぐらいの歳である若者を殺していいものかどうか。熊谷直実は思わず<sup>※2</sup>逡巡<sup>しゆんじゆん</sup>するわけですが、さすが平敦盛は「首を討て」と直実に命令します。直実はしかたなく首を討つ。その後、手にかけてしまった若者を悼んで、直実は出家してしまふ。

このような敗者、弱者への共感の涙。これが日本の無常観にはある。お能の「敦盛」が今でも延々と演じられているのは、こういう無常観、武士道<sup>※3</sup>という惻隱<sup>さくいん</sup>に近いものが今も日本人の心の中に流れていて、心を揺さぶられるからでしょう。

この無常観はさらに抽象化されて、「もののおわれ」という情緒になりました。日本の中世文学の多くが、これに貫かれています。【A】人間の厚さや悠久の自然の中で移ろいゆくものに美を発見してしまう感性です。これは大変に<sup>4</sup>ドクドクな感性です。

物が朽ちかへていく姿を目にすれば、誰でもこれを嘆<sup>なげ</sup>きます。無論、欧米人でもそうです。【B】、日本人の場合、その儂いものに美を感じる。日本文学者のDonald・キーン氏によると、これは日本人特有の感性だそうです。儂く消えゆくものの中にすら、美的情緒を見いだしてしまう。

十年ほど前に、スタンフォード大学の教授が私の家に遊びに来ました。秋だったので、夕方ご飯を食べていると、網戸<sup>あみと</sup>の向こうから虫の音が聞こえてきました。その時<sup>II</sup>この教授は、「あのノイズは何だ」と言いました。スタンフォードの教授にとっては虫の音はノイズ、つまり雑音であったのです。

その言葉を聞いた時、私は信州の田舎に住んでいたおばあちゃんが、秋になって虫の音が聞こえ、枯れ葉が舞い散り始めると、「ああ、もう秋だねえ」と言つて、目に涙を浮かべていたのを思い出しました。

(中略)

三年ぐらい前、日本の中世文学を専攻するイギリス人が我が家に遊びに来ました。私は「日本の中世文学を勉強するうえで何が難しいですか」と訊ねました。彼はただちに「もののおわれだ」と答えました。

「もののおわれ」というのはイギリスにはないんですか」と私が訊いたら「勿論<sup>もちろん</sup>あります。あるけれど、日本人ほどスルドくない」と言つて。従つて「もののおわれ」に対応する英語は存在しない。それに近い英語も存在しないそうです。

人間というのは、何かに対して感性が<sup>5</sup>研ぎ澄まされていると、必ずそれを言語化する生き物です。例えばエスキモー

# 二〇一〇年度 国語

(六十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

中一本

の間では、雪に関する言葉が百以上あると言います。東京でも牡丹雪とか細雪とか粉雪とかド力雪とか、色々あります。新潟へ行ったらもっとたくさんあるでしょう。それでもエスキモーほどではない。【C】、雪に対する感性では、日本人はエスキモーに負けてしまう。

しかし、悠久の自然と儂い人生との対比の中に美を発見する感性、このような「ものあわれ」の感性は、日本人がとりわけスルドい。おそらく世界中の人が持っている感性なのでしょうが日本人がとりわけスルドい。このように思うのです。

※<sup>1</sup>達観…物事の全体を広く見通すこと。

※<sup>2</sup>逡巡…なかなか決心がつかずにとまどうこと。

※<sup>3</sup>惻隠…かわいそうに思っけて同情すること。あわれむこと。

問一 傍線部1～6の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部I「無常観」とは、どのような考えだと説明されていますか。解答用紙にあうように本文から二十字で抜き出しなさい。

問三 『X』にあてはまる作品名を、次のア～エから、一つ選んで記号で答えなさい。

ア 源氏物語    イ 徒然草    ウ 平家物語    エ 枕草子

問四 【A】～【C】にあてはまるふさわしい言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア だから    イ そして    ウ しかし    エ すなわち    オ また    カ 最後に

問五 傍線部IIで、スタンフォード大学の教授が、虫の音を「ノイズ」だと考えたのはなぜですか。五十字以内で答えなさい。(ただし、句読点も一字とする。)

問六 波線部には、「雪」という言葉の種類として、「牡丹雪」「細雪」「粉雪」などが提示されています。同様に、「雨」という言葉の種類の例を、「小雨」「大雨」「五月雨」以外に、漢字で三つ答えなさい。

《記述問題構想スペース》

受験番号

得点

中一本

Scoring grid with columns for question numbers and scores (100, 80, 200, 160, 100).

Blank box for answer or notes.

裏面に続く

《以下は記述問題の評価項目ですが、受検者は記入する必要はありません。》

Main evaluation table with columns for evaluation items (A-J), criteria (a-c), and question numbers (問一, 問二, 合計).

